



営農NEWS



斑点米カメムシ対策として、水田周辺の雑草は出穂2週間前までに除草しましょう

水田の雑草イネは、早期に発見して抜き取ります

○ 斑点米対策の1つとして（畦畔の除草管理）

茨城県における斑点米カメムシ類の主体はクモヘリカメムシやイネカメムシで、これらは斑点米カメムシの中でも大型で加害能力が高く、水稻の出穂期が近づくと水田周辺の雑草に飛来してきます。また、水田周辺の雑草には中型のホソハリカメムシやトゲシラホシカメムシなどが、さらに小型のアカスジカスミカメなどが生息しています。

これら各種のカメムシ類が、水稻の出穂にともない水田内に侵入して穂を吸汁加害します。さらに、水田内で産卵して、ふ化した幼虫が成長し、再び穂の吸汁加害を繰り返します。

このため、水稻の出穂初期による吸汁被害では、不稔籾となり、激しいと青立ちして著しい減収となります。また、乳熟期以降に吸汁を受けた籾が斑点米となり、等級落ちの原因となります。

これから、水稻の出穂期をむかえるにあたり、出穂前の斑点米カメムシ類の生息場所である畦畔や水田周辺等の雑草は、出穂の2週間位前までには除草を必ず実施してカメムシ類の生息場所を減少させてください。

なお、出穂直前の除草は、そこに生息しているカメムシ類を本田へ追い込む恐れがありますので、避けてください。また、出穂期以降は常に、畦畔等の雑草が穂を付けないように管理します。

○ 雑草イネ対策の1つとして（早期発見と抜き取り）

県内の水田で、雑草のヒエなどとは違うが、栽培イネともちよっと特徴が異なる「雑草イネ」（栽培イネと同じ植物種ですが、古代米や赤米とは異なります）の発生が、徐々に拡がりつつあります。

この「雑草イネ」は、出穂後、極めてモミがこぼれて落ちやすく、独自に交雑を繰り返して、水田環境に適応してきた雑草です。このため、多発生してしまうと、「初中期一発剤」の単独処理では除草効果が不十分となってしまう、多種の体系処理や手取り除草など総合防除が必要となりますので、多大な経費と労力がかかり、問題となります。

この厄介な「雑草イネ」対策として、発生の早期発見と早急な抜き取りが、重要な防除対策となります。

<雑草イネの一般的な特徴>

雑草イネとして種々のタイプがあり、それぞれ違う形や色をしていますが、一般的に確認しやすい特徴としては、

- 1 出穂の時期や草丈、出穂した穂のようすが、植えたイネと異なっている。
- 2 モミの色が黒っぽかったり、収穫した玄米では赤色や褐色などの色がついている。
- 3 モミに芒（のげ）があったり、ふ先が着色している。
- 4 出穂後しばらくすると、風などでもモミがこぼれ落ちたり、穂を握るだけでモミが落ちてしまう、など。

<雑草イネ発生の問題点>

- 1 発生したのを放置しておくと、3~4年で多発生状況になって、減収被害を招いてしまった事例があります。
- 2 農産物検査で、雑草イネの玄米が混じっていれば、着色粒として扱われ、混入率が0.1%を上回ると2等に格下げられます。また、異品種混入とみなされて、品種銘柄表示ができなくなります。
- 3 対策を怠り、農業機械を介して拡散すると、地域全体の水稻生産に大きな被害をもたらします。
- 4 混入した玄米を色彩選別機で取り除ける雑草イネもありますが、収穫前のモミの脱粒で、種子が水田に落ちてしまい、水田から雑草イネが減るわけではありません。

<対策のポイント>

- 1 雑草イネを発見したら、直ちに株ごと脱粒しないよう抜き取り、水田外に持ち出して、死滅処理してください。
- 2 発生が確認された水田の耕起や収穫などの機械作業等は、未発生水田の作業を終わらせた後に行ってください。
- 3 雑草イネはダラダラと発芽するため、除草効果を発揮させるためには、有効な除草剤を7~10日間隔で3回処理する体系防除が有効とされています。それでも残った雑草イネは、手取り除草で対応します。有効な除草剤については、日本植物調節剤研究協会のホームページ（技術情報の項）または営農ニュース第2859号（4月13日発行）を参照するか、各農業改良普及センター（農林事務所・経営普及部門）などにお問い合わせください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



農機営農支援部 営農支援課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040